

平和研究者としての夢と責任～研究者を目指す後輩へ～

上智大学大学院
外国語学研究科・国際関係論専攻博士後期課程
林 ゆり

要約

研究者はそれぞれ、様々な夢を抱えて研究に取り組んでいることだろう。しかし、「夢」だけでは済まない研究者に特有の「責任」というものが存在することを強く認識している。私の場合は、内戦により荒廃した国々が抱える政治的問題の解決となるような研究をおこない、政府機能の再建と平和の構築に貢献するという夢に向かって研究を続けているが、それは同時に責任でもあると考える。本稿では、そのような責任を果たすための、研究姿勢、研究テーマ、研究内容、研究の質、研究手法、研究作法について論じた。研究者に課せられた厳しい責務を論じつつも、教育を通じた夢の再生産をすることができるという利点にも言及し、これから研究者を目指すようとしている後輩への参考となることを目指した。

1. はじめに

内戦という究極の人的危機を研究する一研究者としての私の夢、それは紛争と絶望に包まれた地域に平和を構築することに貢献することだ。一見、途方も無い夢と思われるかもしれないが、そのような途方も無い夢に本気で取り組むのが研究者というものだと思う。高校生の時の私は、ブラウン管を通じてみる緒方貞子先生や猪口邦子先生のご活躍に憧れ、将来は国際的な仕事をしたいという漠然とした夢を抱いていた。上智短大から編入学をしてまで上智大学を目指したのは、そういった「夢」が原動力になっていたと思う。上智大学で実際に様々なことを学ぶなかで、漠然とした夢の輪郭が次第に明確になってきた。大学院に入学して以来、私はその夢に向かって一步一步近づくための準備をしている。しかし、内戦が発生する具体的なメカニズムや内戦が引き起こす悲惨な現実について研究を深めれば深めるほど、研究者には「夢だけでは済まされない責任、責務」というものがあるということを強く意識せざるを得ない。

2. 研究に伴う責任～夢だけでは済まされないこと～

私には忘れられ無い数字がある。それはカーリー学長が卒業式で述べられた、「世界で大学教育を受けることができる人口は、100人中たった一人」という衝撃的な事実である。恐らく、生まれてすぐに死んでしまう子供や5歳まで生きられない子供の割合を考慮すれ

ば、その割合は更に低下するのであろう。私と同時期に生まれた子供の大半が、大学教育を受けられないか、この年まで生存できないのである。大学教育を修了し、更に大学院まで進学し研究に専念できる環境にある私は、世界において極めて幸運な限られた人数の一人ということになる。自由な時間を謳歌できる大学院生ほど気楽な立場は無いと思っていた私にとって、この数字は大変考えさせられるものとなった。研究をしたくてもその選択肢さえ持ち得ない多くの人がいるなかで、限られたチャンスを手にした私は多くの人の想いを背負っていることを認識せざるを得ない。大学で高等教育を受けた時点で知識人としての責務が発生するのであり、大学院へ進学した時点で専門家としての責務が生じるのである。当初の私の夢は私自身の自己実現のための夢という側面が強かったように思える。しかしこのような事実を知ってしまった以上、私個人の夢を実現する方途としての研究ではすまされない。ましては趣味、道楽という中途半端な気持ちで研究を行うことはできないであろう。非常に恵まれた環境の中で、自由に研究をできる大学院生活において忘れ去られがちな盲点であると思う。研究者として一人前になるために、学術雑誌への投稿、学会での論文発表、研究助成への申請、そして博士論文の完成といった数々の課題をこなさなければならないなかで、研究者としての「責務」はおろか「夢」でさえもいつのまにか忘れてしまって、目先の課題に忙殺された大学院生活をおくってしまったのではないだろうか。

私の場合は特に、内戦により大多数の国民が人道的危機に陥ってしまっている国を研究フィールドとしており、研究者としての責務はより重い。ある先生が大学院生に「あの課題はどうなった」と聞いたところ、「まだやってません」と答えた院生に対して、その先生は「おまえの研究が1日滞るということは、人々の暮らしを良くすることを1日遅らせるのだ」と叱責したというエピソードを耳にした¹、社会科学という社会的弱者を救うことを使命とした学問を志す以上は、これくらいの真摯な姿勢が必要なのだと思う。しかし、他方で、研究者の使命感に捉えられすぎれば却って傲慢になってしまうであろう。「かわいそうな人たちため」に行っている研究が、実は「自分のため」でもあるということは看過できない。すなわち、私の研究そのものが、彼らの悲惨な現実が存在することによって支えているのである。問題解決のためとはいえ、途上国における人々の貧困や内戦における難民といった悲惨な現状は、研究者にとって観察や援助の「ターゲット」、「研究材料」としての側面をもっている。いわば「飯のタネ」として扱うことに荷担していることから目をそむけるのではなく、そのような認識をもったうえで謙虚に研究をしなければならないと思う。内戦研究という私の仕事、そして生活は、彼らの夥しい不幸の上に成り立っているということは否定出来ない事実なのである。私たちは、時としてそのことを忘れてしまいがちになる。そして、何のための研究なのかを見失い、就職すること、業績をかせぐことがいつの間にか目標にすり替わり、「研究のための研究」に陥ってしまうことさえある。例えば、内戦研究では、1000以上の死者があった場合を内戦有りとしてカウントし、999人までであれば内戦がなかったという様に扱うことが常識的な作法となっている。しかし、千人目の死亡者と他の死者との間に「質的な」差があるのだろうか？1000人で線を引くことの意味はなんなのだろうか？恐らく便宜的な区分に過ぎない。しかし、亡くなった方一

¹ 小浜裕久『ODAの経済学』日本評論社、あとがきより。

人一人には家族がいて、様々な背景があり、そしてどの一人の命の重さも同じはずである。時として、研究者としての「常識」が人間としての「常識」を忘れさせるということに、私は自ら戒めると同時に、数字や統計に表れない部分への想像力を働かせることを心がけたい。

以上の点を考慮すると、研究テーマも、一人よがりのものでは研究者としての責任を全うしたことにならないであろう。どんなに研究姿勢や心構えがしっかりしていても向かうべき方向性が間違っているのでは意味がなく、研究者のエゴとなってしまう。短期では成果の表れない長期的事象を扱う研究の場合、自己満足的即面があることは否めないが、社会的意義を持たない研究に陥らないように心がけたい。社会的意義の有無は学術雑誌への採用や助成金の採用といった形で計ることができる。しかし他方で、研究マーケットで「売れる」研究とは、その時々の時流に乗ったテーマであることが多く、売れる研究が必ずしも研究者の責任を果たした研究になっているとは限らないであろう。私のライフワークともいえる研究テーマは、内戦により荒廃した国々が直面している様々な政治的問題を研究し、政府の再建と平和構築に貢献することである。この無謀ともいえる壮大な夢の実現のためにまず、「内戦」の発生・終結という事象を重要な研究トピックとして日本の国際政治学に定着させることを私の当面の研究課題として設定した。1989年の冷戦終結以降、国際社会において第一次および第二次世界大戦にみられたような大規模かつ長期的な国家間戦争は発生していない。しかし、発展途上国の多くが経験している内戦は、冷戦の終結とは無関係に継続し、そして新たに発生している。また、内戦状態にある国、あるいは内戦を経た国が、先進国の経済力や政治力に依存することがあっても、先進国の国益が内戦の国に左右されることはめったにない。つまり、伝統的に大国間の政治・経済関係が主な研究対象とされてきた国際政治学では、「内戦」という事象は必然的に軽視されてきたのである。だが、大国間の政治および経済関係が安定化し、大戦争の発生が蓋然性が低下していくなかで、現代の国際社会では、国家間戦争以外の新たな事象が注目されるようになった。それは、小型武器・対人地雷の輸出規制や、大量虐殺などの人権侵害といった規範的問題である。これらの事象は常にといいいいほど内戦に付随して発生するため、国際政治学者の注目が内戦に対してもそそがれるようになった。にもかかわらず、内戦国における政治問題とその解決に関する研究は、地域研究者や比較政治学者の領域であるという認識が圧倒的である。しかし、国連の平和維持活動 (PKO) や NGO などの国際援助組織が内戦国の平和構築と政府機能の再建に関与するようになってきた現在、それら組織の活動が及ぼす影響を考慮せずに、内戦の発生や終結を十分に理解することは難しい。つまり、現代の内戦の発生・終結の因果メカニズムを明らかにするためには、内戦国内のアクターだけでなく外部アクターを分析に取り入れた、より体系的な研究が必要なのではないかと思う。私は、自分自身がそのような視点に基づく研究をおこなうことを通じて、内戦についての体系的な研究を日本の国際政治学に定着させてゆきたい。地道で遠い道程ではあるが、学会においての認知が高まり、政策に結びつけば長期的には問題解決に貢献することになるであろう。

大学院へ入学以来一貫して、このような問題意識のもと研究をすすめてきた。大学院博士前期課程のときは、先行研究をひたすら精読する既存の知識の「消費者」にすぎなかったが、博士後期課程の現在、自らが知識の「生産者」として自覚をしなければならないと

肝に銘じている。学会報告、学術雑誌への掲載という形で研究成果が世に問われるに及んで、「発信」に伴う責任が生じるのである。世間からは専門家として見られ、研究の姿勢や内容の面白さだけでなく、その「質」が問われることになる。欠陥のある研究、害のある研究を世に出せばある種の「製造物責任」が生じることを覚悟しなければならないであろう。仮に学会で評価されたとしても、私の夢である内戦国の平和構築に本当に役に立つ研究なのかは簡単には答えはでないであろう。私は12月に上智大学 COE プロジェクト「AGLOS」で、難民問題についての報告をする予定である。簡単な数理モデルを用いた分析を行うが、仮に理論的に完成された研究だとしても、その成果を発信することで研究者としての本当の責任を果たしたことになるのだろうか？研究成果を難民の当事者の前でも胸を張って報告できるのだろうか？その自信はまだ無い。しかし、研究の理論的面白さと社会的意義との間に乖離が存在することを常に意識し続けることで、研究の質を一定に保つことに寄与するであろう。

そのための一つの方策は、分析のための適切な方法論を使用するということである。誤った方法によって導かれたインプリケーションは真理でないばかりか社会的実害を生じさせる場合もある。また、分析結果の解釈を誤った場合も同様である。研究者は得てして言い過ぎる（「Over Estimate」）ことが多いが、研究の限界を知る謙虚さも必要であろう。もちろん剽窃など研究作法上の過ちは論外である。誤った方向性に向かわないように、研究仲間と相互に批判をしあい研鑽することは刺激になる。それ以上に、自らの研究姿勢を、自分の「夢」と照らし合わせるという絶えざる自己評価こそが、研究の質を保つことにも欠かせないであろう。その意味で、本稿の執筆は、大学院に入学した当初から今に至るまで、私が抱きつづけてきたはずの夢を再認識する良い機会となった。

3. 教育に伴う責任～夢を再生産する仕事～

研究者は、知識の自由な生産者であるのみならず、もう一つの特権をもっている。それは、人材の「生産者」すなわち教育者としての仕事に従事できるという点である。私自身、大学に入学するまで全く知ることのなかった、戦争と平和のメカニズム、発展途上国が抱える貧困の経済的原因、国際社会が直面している移民・難民問題などを上智大学で初めて学び、国際政治学という学問に興味を持った。このことを思い返すと、教育者として学生にとってそれまで未知であった領域を学生に触れさせ、知的発達を促すことができるのは、この上なくわくわくすることである。特に、私自身が上智大学で経験したように、学生の知的好奇心を喚起し、探究心を育てるような教育者でありたいと思う。教育は夢を与え、夢を再生産するという意味をもつのである。

内戦における小型兵器・対人地雷の被害、大量虐殺、難民問題などといった現代の国際社会が直面している問題の存在は、新聞やテレビなどのメディアから知ることが出来る。ただそれら問題の重要性はわかっているにもかかわらず、それら問題がなぜ発生し、そしてなぜ簡単に解決できないのかということ、直感的に理解することは決して簡単なことではない。そこで大学とは、より専門的な知識を身に付けるという意味において、自然および社会現象の原因と結果、すなわち因果メカニズムを学ぶ場であることが大切であると私は考える。ただし、人間社会で起きる現象の発生は極めて複雑で、因果メカニズムをひとつに特定で

きないことに難しさがある。事象が複数の要因から発生する場合、解決のための方法も複数必要となり、このことが国際社会が直面している問題の解決が困難である理由のひとつであろう。国際政治学を専門とする教育者として、私は将来、自分の専門である「内戦」の発生と終結の因果メカニズムを教え、それに基づき内戦の解決策を探求するという知的作業を通じて、学生に紛争解決の重要性と難しさを学んでももらいたいと思っている。このような知的訓練を提供することで、内戦の平和構築に貢献できるような人材の開発をすることが、私の「教育者」としての「夢」である。内戦国における政治的要因を観察・分析し、その研究成果をまとめた論文や本を学術コミュニティに発信するという方法に比べれば、「教育」により内戦の平和構築に貢献するという方法は、あまりにも間接的すぎるかもしれない。しかし、上智大学の卒業生の多くが、平和構築に貢献するような職業、例えば、非政府組織(NGO)、民間の開発コンサルティング、独立行政法人の国際協力機構(JICA)、国際連合や世界銀行などの国際機関の最前線において活躍していることを鑑みれば、教育がいかに重要であるかは明らかである。そして同時に、これまで大学院において指導を受けてきた教授らが、一流の「研究者」である同時に、素晴らしい「教育者」であることもわかる。私の「研究者」と「教育者」としての夢を実現させるためにも、その双方においてプロである上智大学の教授から、専門知識以外の多くのことをこれからもずっと学んでいきたいと思う。

4. おわりに

100 人の世界の中で、一人の研究者が夢を語る時、その夢は残りの 99 人の夢を背負っている。研究者の「夢」は、社会に対する「責任」を持つのである。一方、「責任」の重さゆえに社会的に認知された研究であっても、その裏には研究者個人の自己満足的・利己的ともいえる「夢」が潜んでいる。研究者は時としてこの極めて根源的なことを忘れ、使命感のみが前面にでて夢を忘れた研究、夢を語るだけで社会的意義を持たない研究、夢も責任も放棄したような研究を生み出してしまふ。私自身も、夢か責任かで悩んだこともある。しかし、研究者とは、夢と責任とを両立させることができる職業ではないだろうか。私の研究者としての仕事、それは平和を願う一研究者として、内戦により荒廃した国々が抱える政治的問題の解決となるような研究をおこない、政府機能の再建と平和の構築に貢献することである。これは「私の夢」であると同時に、「私の責任」でもあると信じている。私自身が、私の研究を信じ、最終的な責任を引き受ける覚悟がなくては、誰が私の研究成果を信頼してくれようか。時に謙虚に柔軟に、しかし確固たる信念をもって研究に望まない限り、夢も責任も霧散してしまうであろう。確かに、博士論文を完成させ博士号という学位が与えられるまで数年を要する大学院生活においては、大学院生はいつ終わるのかわからないリサーチや執筆に、底知れぬ不安を抱くことがあると思う。このようなとき、後輩には「なぜ研究者になる夢を持ったのか、そしてその夢の実現にはどのような責任を負うのか」ということを改めて考えてもらいたい。夢と責任について考えることは、おそらく自分自身の研究に誇りと責任感をもたらし、研究者というゴールに到達する気力を与えてくれるであろう。これは後輩へ贈ることばであると同時に私自身への戒めでもある。